

# 津輕曹洞宗史序説

小館 衷三

まえがき

弘前市の旧市へおゝよそ旧城下町に当る部分に現在、寺院は約六十一位ある。そのうち、曹洞宗は禅林に三十三ヶ寺がまとまって寺院街を構成し、他宗は主に新寺町に二十四ヶ寺、他に数ヶ寺がある。これは何れも藩政当初弘前築城の時に近御近在から集められたものである。この事に關しては幾度か筆をとつて来たが、<sup>①</sup>今新に次の向經にぶつかったのでこの究明の糸口を述べてみたい。

オ一は曹洞宗と統一者との關係

オ二は寺院が弘前に集められる前の状態  
右二点をいずれも主として曹洞宗に關して。

オ一に關しては多く中央で明らかにされているのと大差がなく、当地方の史料によつて実例を述べることでできる。

オ二に關しては、集められる前に寺院は別図の如く存在したのであるが、どのようにしてこれらの村落に仏教が浸透していったのであろうか。という問題は、当地方

に關してまだ究明されていない。それは、この事に關した史料が皆無といつていいくらいで、史料のみで裏付けようとすれば全く手の下しようがない。しかし、集められる以前に寺院が何等かの形で存在したのである。私はなんとかしてこれを解明したいと思つて取りかゝり、まず主流である曹洞宗について述べてみたい。

## 一

鎌倉時代の仏教は法然、親鸞、道元、日蓮等の宗教改革者によつて新たに展開されたことはあまりにも顯著なことであるが、その布教、民間への浸透に關しては、鎌倉時代よりも、むしろ室町時代中期以降であることが最近力説されるようになってきている。鎌倉時代―南北朝にかけては眞言、天台の密教が盛んであつたことは、各地の寺院、板碑等からしても推察される。東北、津輕地方も若干の時期的におくれるが此の傾向があり、此の度、特に述べる余裕はないが、津輕において、鎌倉末―南北朝期の数百年に及ぶ密教系の板碑にそれがかがえる。<sup>②</sup>

(延宝八年の寺院岡山世代調による)

○弘前に移転した寺院



ところが、戦国期—江戸初期にかけての寺院を見ると、圧倒的に曹洞宗を才一とし、浄土、門徒、法華宗の多いのはどうしたことであろうか。しかも、本州の最北の地、津軽にみられる現象であるが、この証明は仏教諸宗派の布教、伝導の一例として意義あるものと思われる。

## 二

曹洞宗の全国的伝播は総持系峨山の二十五哲、なかんずく、五院の南祖（別図2の□）によることは多くの先人がすでに述べられているところであるが、そのうち東北に關連の深いものは次の如くである。

無底良紹—月泉良印—直叟道叟—正法寺系

源翁心昭—南奥羽

大源泉真—越後耕雲寺系

等で、この事は「日本宗教史研究1組織と伝導」の「禅宗の地方伝播とその受容層について—室町前期を中心として—」近世東北における新仏教の伝播と教団形成—曹洞宗と真宗を中心として—に詳細に述べられているが、仙台、山形附近が中心で津軽には、わずかにふれているにすぎない。

津軽に入つて来た曹洞宗は次の三派であつて、今その実情を簡単に述べよう。

一、正法寺系—月泉派

二、大源派—大源泉真

## 三通幻派—通幻寂靈

正法寺は無底が土豪黒石正端、長部重義の招きにより、貞和四（一三四八、南北朝時代）年、天台の黒石寺を曹洞宗に改め、法弟月泉は曹洞宗才三の本山として承認されるまでに発展させた。また道叟は英文大（一三五六）年に、津軽台浦に高沢寺を建てている。これが終々派結蟬蛻津の高沢寺の前身とされているが、地名の上から、今後の究明をまたなければならぬ。その後、此の系の寺院に關しては全く不明で、現在弘前市の正光寺がその末寺として（④）現在には通幻派の長勝寺の客末—ヶ寺があるにすぎない。これは後述するが、正法寺系は南部氏に依存して布教していたためでないかと思われる。

才二の大源派に關しても確かな事は不明であるが、弘前市の隣松寺を派頭とするヶ寺があり、隣松寺の開基花巖春公、開山真願壽泉に關しても

隣松寺 碑詩

隣松寺者宣禄年中（一五二八—）基吉田村、慶長年中移弘前來、開山祖師者真願壽泉、開基檀那花巖春公庵主共不詳其求由也。（下略）

（曹洞諸寺院縁起志）⑤

## 五龍山隣松寺

一、当寺者御当地大源一派之古本寺也 永正十七（一五〇四）年於吉田村初而立一寺、梅英和尚住持職相勤候 其後漸及破壊不出世之僧鑑寺相勤数十年

相道候 弘治年中（一五五五）二花齋春公与申  
人私田少々寄附仕仏殿等造営之由申伝候

（寺院南山世代調）<sup>⑥</sup>

とあり、前者では草創が享禄年中であり、真頼の弟子の  
福英が永正十七年に住職した等の矛盾がみられ、本寺、  
法系をさかのぼることが困難で、一応長勝寺末とされて  
いるが、次の特色があつて犯首の立場をとつていた。

(1) 大源派九ヶ寺の初廟の地は図1のように、西根一岩  
本山麓をめぐつて存在すること。これは大源派は西  
海岸方面から入つて来たのではないかと思われる。

(2) いずれも密教的色彩の強い年中行事を持つて藩政時  
代から現代まで行われているものが多い。

○派頭の隣松寺の千餘地蔵の大般若会（旧七月廿四  
日）

○宝鏡院の秋葉大権現の大般若会（旧正、五、九月  
の廿四日）

○高德院の金毘羅大権現の大般若会（藩政時代中止）

○宝泉院の鬼神様・赤倉信仰

○陽光院の清水観音信仰（御国札所のオニ番）

○勝竜院の石神信信（大石信仰）

(3) 此の派は独自のまとまりを持っていたようにで

……殊二月寒和尚（隣松寺2世？3世？）在住之時  
内中及末寺之嗣法相統一大源一派之支配仕候 自是

以来内末之寺院五節句并巻月三度之出仕于今葉岡街  
相勤候 其外嗣法相統後住之差図皆当寺仕候

（寺院南山世代調）

……又隣松寺者此處大源一派之本寺也 其末末寺者  
大小九ヶ寺……（曹洞諸寺院縁起形）

と史料に見られる。

才三の通幻派は津輕曹洞宗の主流であつて、津輕氏  
の祖・大浦光信が石川花谷（島根県）の江山智永を師と  
して裡里岫巖（岫巖）の海蔵寺に住せしめていたのは明永  
年中（一四九二）といふから、当地方ではもつとも古  
い事にぞくする。光信は死にあつて一禅刹を建立し、  
菩提を弔うことを遺言したといふ。子の盛信は江山に計  
つて陽超派（通幻派の一派）の菊仙持寿を迎え、盛大に  
送葬をなし、裡里に一寺を建て、光信の法号の長勝隆栄  
から、長勝寺と称した。南山菊仙は図2のように、陽超  
祖宗の弟子春米慶印の法嗣であるが春米の南山所は不明  
であり、陽超の南山所の長香寺は延宝年間すでに廃寺  
であつたのでさかのぼつて玉窓良珍の越前の宗徳寺（現  
弘前の宗徳寺）をもつて本寺としている。以来、長勝寺  
は津輕氏の菩提寺として津輕氏の發願と共に藩政時代に  
入り、椽所として栄える。また、同じ通幻派の一派の現  
室派の明室祥哲が為信の命により、田舎館の耕春院（現  
宗徳寺）に住し、東根一帯の同宗の支配を命ぜられてい

しかし、耕春院の廟かれたのは天文十一（一五四二）年であるから、為信の生れる八年前である。だから、既に部山によつてさへ、やかなりとも寺庵として廟かれておつたものと思われる。

此の通幻派と津輕氏との結びつきは一向題であり、また此等の宗派が津輕に入つて来た頃は、津輕は南部氏の支配下であり、津輕氏（当時大浦氏）もまた南部氏の一族とされていたことを考えれば、津輕への曹洞宗の伝播は南部氏との關係をゆきにしては考えられない。しかし南部氏に反して津輕を統一した為信及び子孫は、それ以後は出来るだけ南部色を払拭したことから一例えは、為信も当初、南部右京大夫と称す<sup>⑧</sup>。南部系の寺院に属しても、津輕色にぬりかへたものと思われ、南山、住職に属しても持後、不詳等の扱いをしつたらしい。

### 三

曹洞宗の布教がのびたのは高山の二十五哲によることが大きく、南北朝時代である。まず各地にちらばり、点となり、さらにそれをつらねて線となり、これが面となるのが地方に定着する過程であり、津輕地方においては境内四十余ヶ寺の草創の時期からみて（図三）、菊仙の長勝寺（一五二六）頃から江戸初期に渡る約一〇〇年間に、およそ、大永六（一五二六）年から寛永年間（一六二五）である。これは他宗（浄土、内徒、法華各

宗においても大体おなじことが云える。

### 四

統一者との結びつきを少しく述べてみると、後述するが送葬、供養のため、次は当時領国形成の政治的知識として儒学を身につけ、精神的指導者として禅宗の僧は最適であった。これに属しては光信と江山、特に為信と格翁の例はよくそれをあらわしている。

公（為信）講武之暇就長勝八世格翁和道而参究普化鈴木之話……格翁返和尚近江人勅特賜義鑑贈禪師其為人不論榮利不顧貧賤唯法維務故大守立而狎師、庶人尊而為私……（曹洞諸寺院縁起志）

また、藤先寺南山の中岳は為信の使者として

為信（公）為羽州大山城主斯有私通之事……中岳ヲシテ私達書セシム不及固辭故入難所及往而還通羽州盲鼻之僧、問主怪之捕、劓其鼻岳雖殘僧形以不失書為幸焉、漸達政卿及捧返輪、為信公欣持無止而立賜由數百步……於是岳、庵為寺自ラ成南山鼻祖也……

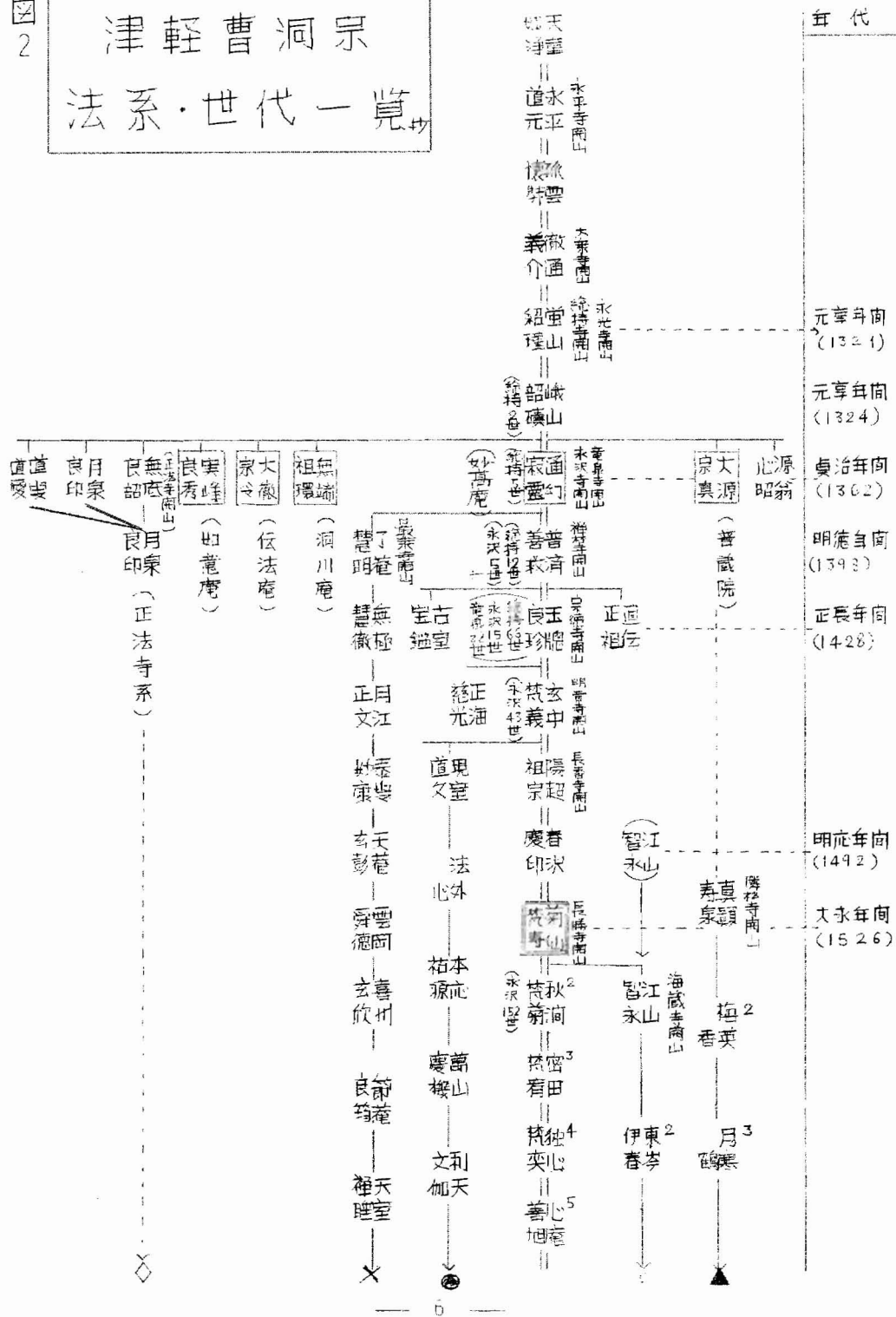
（曹洞諸寺院縁起志）

また、中央文化を背景にしての身辺の壯嚴化である。従つて出来るだけ地位の高い僧を側近に招いたのである。何えは

長勝寺二代秋菊和尚越前州人、弘治二年（一五五六）受輪次之請從享範寺住丹州永次寺、（縁起志）

津輕曹洞宗  
法系・世代一覽

耳代



皇町時代

天正年間  
(1572)

(1603)江戸時代

寛永年間  
(1626)

元禄年間  
(1700)

寛保年間  
(1741)

源隆寺

海蔵寺

祖龍室

長勝寺

挂山

布州

明室

禪哲

喜山

虎山

俊良

水岩

雲聖

雲水

雲聖

補陀

孝大

默然

春悅

紋祖

春天

祖直

宗物

全戸

徒船

白球

默孤

元寂

梅芳

智曉

義増

文忠

善突

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

龍直

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

善若

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

善若

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

善若

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

善若

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

善若

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

善若

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

善若

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

善若

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

善若

善突

善宿

泉龍

警在

雲聖

徒船

香春

高岸

呂指

玄貞

大閑

正法寺系

正法寺

仙藏

瑞天

雲海

明玉

林繁

祖華

易宗

高玄

玄天

玄天

玄天

となり、通幻南山の永派寺の輪住に出、同寺一五二世となり、同じく長勝寺八代格翁曉暹は二の二世、十三代在州、宅は二三六世となつてゐる。残念ながら、越前の龍泉寺（通幻南山）、禪林寺（普濟南山）も輪住地であるが、幸室なる火災によつて輪住帳を失つてゐるので不詳である。時代は下るが、長勝寺十八代拙笑呂山、三十三代祖山仙宗は五院の妙高庵に住し、大本山絶持寺の輪住をつとめてゐる。

一方、同じ長勝寺七代直翁龍直は勅特賜仏超化給禪師、前述の格翁は同じく義繼壇輝禪師、耕春院二代座主麟奕も弘通日光禪師の勅持の名僧であつた事も統一者の身辺を飾り、地方民にとつては此服の一材料であつたことは疑ひがせまい。他家であるが為信は、各宗の名僧を集め、京都より連れ帰り、一族、藩士の師とした例は、法華宗の日健、浄土宗の法庵崑嶺（卓昌寺、普願寺開山）、真言宗の省観法印（最勝院四世）等数多い。

次に各寺院の住職の出身地は当然、津輕地方が多いが、中心寺の南山は北陸出身者が多く見られるのは曹洞宗としては当然であるが、中央文化が日本海岸を北上して来たことを考へられる。

## 五

此の津輕へのオ一歩は、前述のように南部氏—津輕氏との結びつきにはじまるが、それだけで布教がのびるも

のでもない。かの塩漬宗が権力者と結びついて発展したが、地方への浸透がゆきすぎまりになつたのは、次の曹洞宗に比すればよくわかると思ふ。曹洞宗は、いわゆる「曹洞土民」の諺どおり、教線拡張には敢身の努力をなしたのである。すなわち、面としての民衆への浸透は次の諸点によるものと考へられる。

### ① 密教的色彩が非常に強いこと。

このことに關しては皇明初期の板碑等から推して、当地方も天台系の密教的信仰が盛んであつたと考へられ、古い猿賀の奈沙大権現—神宮寺にしても、薩崎の平等院、乳井の毘沙門宮、西郡日照日の天台寺等皆、天台系の寺院であつた。このような密教的色彩の濃い地方に曹洞宗が浸透するには当然密教的布教方法をとつたことはうたがひない。残念ながらそれを如実に示す史料を欠くが他地方の布教から推して、また、藩政時代に入つてからであるが、長勝寺をして藩は雨乞の祈禱などをさせてゐるし、<sup>⑩</sup>前述の大源派の寺院が密教的であること、さらに、現在、曹洞宗寺院に伝えられてゐる切紙集の内容は、祈禱、呪法的なものが殆どである。次は、正光寺十三世祖海南直が、寛政元（一七八九）年の夏安居に徹參堂定長老に与えたもので、「右嫡々相承而至吾、今説傳附畢」とことわり書きした「切紙參話目録」である。項目だけを列挙してみよう。

祝聖 一廬消災咒 三時風經 仏像点眼安座 献靈



供 施餓鬼 鎮守齋經 立印塔 化亡現形夜入家内  
法 鎮基焼 土葬之大事 移基 廟移並生死大事  
三聖印圖並塔印之法 死人直切紙三通ノ内 票火  
非人引導 為亡者授戒法 畜生戒 入棺 下炬並  
等饗 懷胎亡者 鎮亡者豐現形秘法 轉驗亡靈現形  
血脈相伝 略伝戒法 室中莊嚴 伝授參 勸陀勸  
地參 合血之參 請雨 鎮守參 山神並水神授戒  
以上終 鎮守二通 夏中禱會 四門三通  
また 弘前禪林三十三ヶ寺の境代に勧請されている鎮  
守堂は、図5の下段の通りであるが、この他一、二を祀  
っている寺院もあるし、伽藍内に、尊勝天、大黒天等を  
祀っている例が多い。

一方、修驗道の民衆への浸透ぶりには、修驗の経緯であ  
る大行院（弘前）が元禄十五（一七〇三）年に書上げた  
「堂社縁起修驗直由緒」にうかがわれる。これは大行院  
支配の領内百余の堂社（修驗の寺院と神社）の縁起を書  
きしるしたものであるが、いずれも自堂、自坊の靈驗あ  
らたかなことをあげている。二、三の例を次に述べよう。

#### 矢沢村正八幡宮

元和元年乙田三郎左衛門ト云フ者古ル小畑ノ三本木  
ニ於テ、異躰ノ木像ヲ求メ、神体不分明、故ニ捧湯  
花ハ矢沢村ノ氏神トナス……

#### 五輪代村正八幡宮

文珠院

寛永年中、岡村陶登ノ砌リ、一柳ノ位ニ長サ三寸、  
得異体ノ像、其ノ場ヲ用社地、一字ヲ修造、  
捧湯立、然正八幡ノ有神託、故ニ氏神トス……

#### 玄船村千手観音

玄住院

大同二年、田村丸岡基、七面四面ノ堂中興ス 同村  
館主岩別浦太郎左衛門尉信正、本願ハ東四坊再興ス  
其比無本尊、故ニ慮心作千手観世音ヲ安置、往古ハ  
金森山勧請寺ト云フ、禪院別當ス……

等々、枚挙にいとまがない。修驗の山伏達が民衆の中に  
浸透して行くさまがほうほうとして浮んで来る。此の中  
に禪宗の僧が入つて行くのであるから、治病、除災、祈  
禱を持ちこんだことはうたがない。

また菅江真澄の逆覽記中に、津輕、秋田の曹洞宗寺院  
でもと、天台宗であつたのが変つたと教ヶ所で具體的に  
のべている。<sup>⑩</sup>曹洞宗が密教的修法と次の葬式の方法をも  
つて進出していつたことを物語るものであろう。

#### ②曹洞宗は葬式の方法をもつていたこと

当時の仏教の特色は弥陀信仰、密教、葬式の三つであ  
つたが、修驗道は祈禱を行つたが葬式の方法を持たなかつた  
事は致命的であつた。次々に葬祭が民衆化して来た  
中世末期にいち早く葬式方法をどのえていた曹洞宗は  
御村ノ民衆の宗教として他宗にぬきこんでいたのである。  
船沢にある正應元（一二八八）年、源光氏建立の板碑

(重要美術品)も、弘前市熊野興照神社境内の建武三(一三三六)年建立の古碑も五七忌(三十五日)の供養塔であることから豪族たちの間には、すでにこのような仏教行事が浸透していたのであろう。前述のように大浦光信の葬儀は

……盛信公請菊仙禅師、殯殮葬送皆以法故……蓋菊仙越前人、得法於春沢ノ印五、六年來歸睡于茲、此日出世直瓦弥盛……(曹洞諸寺院縁起布)とあり、また、

……藤光寺者、天正年中所創也、南山中岳、納衣縁鉢而鑿于藤崎村、于時為信婦人有兩弟焉、妻長年中有故節同日死矣、婦人為其追薦法書中岳……(同書)以公(為信)之平日之婦依僧(拾翁)得退院老僧為衆炬之導師……(同書)

等が見られ、民衆の間にも簡易な葬法がとり行われていたものと思われるが、史料を欠く現在としては推量の域を出ない。

## 六

最後に、津輕氏統一後、城下に寺社を集めたと簡単に振って来たが、私はこゝに重大な問題をみいだす。それは、何故集められたかも大切であるが、集められる状態にどうしてなっていたかということである。すなわち、各宗派とも何等かの形で僧侶と民衆が密着していたのである。

此の時代の津輕地方の民衆のあり方に關しては殆ど究明されていない。が中央に比べて大分おくれていたとはいえず、少しづつ、鄉村制が成立して来ていたのではないかと思われる。此の中に各宗派が、特に曹洞宗が浸透していた。それだからこそ統一者は城下に集める必要もあったし、それによつて統一を一層強化したのである。曹洞宗寺院が領内各地に存在し(図一)、民衆を多くのかんていた事は、元禄頃の史料であるが、切支丹調べ(図三)によつても推測されることである。

以上、津輕に曹洞宗が伝播された状況を述べたが、前にもことわつたように、宗教史は勿論、一般史においても中世史料を欠く津輕では、如何ともしがたく、江戸時代の史料で推量するにとどまつた。今後、これを土台にして、次の諸点を中心に解明をすゝめて行きたいと思うので、諸案の御鞭撻を乞ふ次第である。

### ①、津輕中世史の解明

### ②、津輕中世宗教史―板碑信仰と寺院との新層の解明

### ③、曹洞宗のうち、圓頓派はまがりなりにも法系、寺

統を知り得るのに対し、大源派は法系、寺統ともに分明である。大源派寺院は越後を中心にして多いのでその方向に採つて行きたい。同時に、図4で知り得るように曹洞宗寺院の近代住職の出生地は隣國秋田・山形翁が多いことは秋田地方、さらに山形、新泻の曹洞宗史を研究することによつて何らかの光

四 御用入支配方切支丹証文改め人数表（弘前藩日記）

真言	天台	内徒	法華	淨土	禪曹洞	総人数	男女	宗派 年号
16 11 10 9	13 13 3 2	29 65 22 20	70 78 21 22	169 150 98 51	747 631 346 217	1044 948 500 318	上男 上女 下男 下女	元禄13年 1700
43	31	136	191	468	1941	2810	計	
14 10 5 2	37 24 11 6	107 96 36 17	98 110 30 26	214 223 64 46	900 766 253 139	1400 1228 400 236	上男 上女 下男 下女	宝永7年 1710
32	78	256	264	547	2058	3264	計	

明が見い出されるのではなからうか。

四 津軽曹洞宗院歴代住職生国統計（延宝八年世代調）

生国 数	津 軽	羽 州	越 後	越 前	能 登	加 賀	出 雲	南 部	仙 台	岩 城	常 陸	上 野	武 蔵	下 総	奥 東	信 濃	尾 張	不 詳	松前近江石見 大坂大和山崎 伊勢日向十野 津江相模は 1人す
105	42	6	6	3	2	2	2	8	11	3	11	2	9	2	4	2	2	21	

註

- ① 弘前市史 藩政篇。陸奥新報社「郷土を科学する」。
- ② 中村良之進著「陸奥古碑集」昭和2年。成田孝栄「青森県西海岸の板碑文化」東奥文化才11号 青森県文化財保護協会刊。
- ③ 栗山泰音著「嶺山史論」明治四十四年 鴻盟社刊。鈴木泰山著「禅宗の地方発展」敵愾史学叢書 鈴木泰山「曹洞宗の弘布とその外護者」国民生活史研究4、生活と宗教 伊東多三郎編 昭和三十五年 吉川弘文館刊。
- ④ 曹洞諸寺院縁起志⑤に唯一、月船（泉）派と明示。藩命により、元禄十五年に書き上げた縁起志、写本が弘前市立図書館 弘前市宗徳寺（旧耕春院）蔵。藩命により、延宝八年に寺社奉行成田七郎左衛門、岡文左衛門が調製したもの、原本が弘前市長勝寺にある。内容全文は、本誌才三十七号、地稿「津軽藩政時代の宗教史料の一考察」に発表してある。
- ⑦ 「……此寺（長勝寺）之本山古今不詳、因茲近年近於其源以加州宗徳寺（且為本寺）俟舊澤（南山菊仙の師）之道場顯露之日而已矣」（曹洞諸寺院縁起志）「一当寺（長勝寺）者陽超一派二初越州長香寺之

寺之由申候 然共由諸悪之右不分明……」

(寺院南山世代調)

② 文部省史料館に「南部石京大夫為信」の実物蔵。

③ 前掲 圭室錦成著「葬式仏教」の「禅宗の庶民化」

「葬式仏教の課題―仏教の進出、曹洞宗」

④ 弘前藩日記 元禄九年。

「一病瘵除の祈禱仰付けられ候。長勝寺、耕春院両寺庵の僧にて施餓鬼執行相勤め、御家中方らびに寺社に廻し御札出し申すべき旨、堀伝左衛門宅に於て長勝寺へ申渡す」

永禄日記 享保十年。

⑤ 「四月から雨が降らない大日照りで、大円寺に雨をいをお、せうけたが効果なく大行院にお、せうけ南沼池で大勢の山伏が集まりて祈ったがため、六月十八日の晩、弘前の町中、一軒毎に灯籠を一つ出して池の上で神楽を行ったがため。長勝寺三十三カ寺の僧が集って祈禱したがやはり降らなかつた。大行院・末倉へ祈つてもため、七月七日の夜から降った。

⑥ 菅江東澄遊庵記 4 雪の直奥雪の出羽路は真、「滝峰山松源寺」といって、むかしは天台宗であつたが、曹洞宗に改宗した寺である」

同21頁 「比内の郡田代山の麓に長慶寺という天台宗の古寺があり、この寺号をうつして長慶庵とよび、弘治年間に万年山長慶寺と改めて曹洞宗となつた」

## 補遺

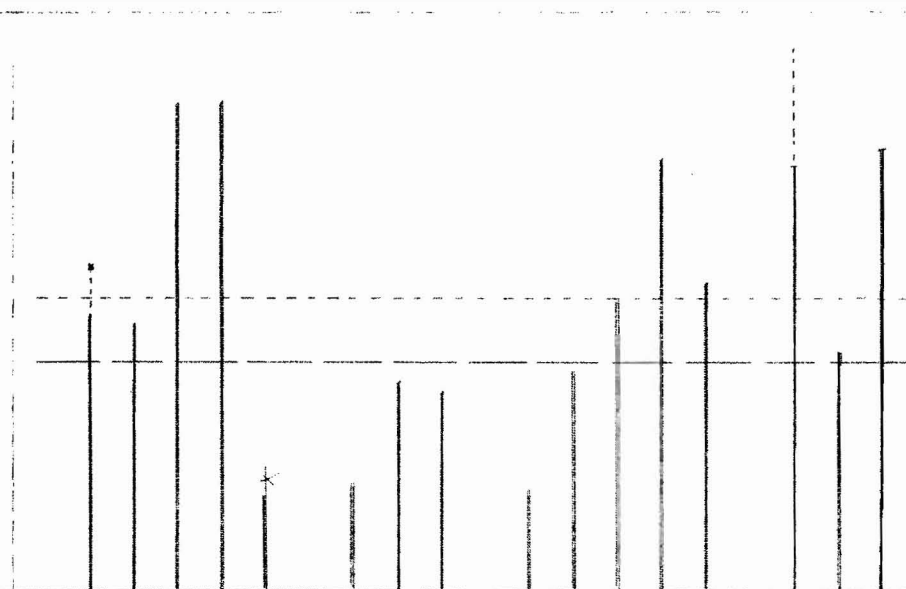
今、稿を終えてから「國史備考」の曹洞宗法系一覽をみて「格翁桂庵」の名を見出した。

本文で述べたように、蒲祖津堅為信の師の長勝寺八代格翁庵は正江の人で勅特賜の禪師号をもつ名僧であり、通幻派の本拠地、丹波の永来寺に輪住した人である。が七代直翁とどんな関係があつたか、どこの寺で修行して、どうして津輕にゐつてきたのが全く不明である。先日、丹波の永来寺に格翁の輪住を伺ひ合せた所、同寺の住山庵に、二〇二世、出身寺・津輕長勝寺 格翁桂庵とあることがわかつた。

右のことから格翁庵と桂庵とは全く同一人であることがわかつた。その桂庵と同名の僧が同じ通幻派―了菴派にある(図2)。もしも長勝寺格翁と了菴派の格翁が同一であることでも今後判明したら、その行跡、布教の事情の解明の一助となるのでは旨いかと興味を持たれる。なお、庵と桂の一字のちがいは、伽藍法の当時としては、寺の住職になることは前住職の法をつぎ弟子となるので平号の一字を替えることが普通に行われていた。それに普通は、新仙和尚、格翁和尚と直号を使用し、せいぜい春栄、印、菊仙寺和尚、格翁庵和尚といつてゐるので、平号の一字はそれほど重要でなかつたらしい。

5 津輕曹洞宗寺院一覽

1480年  
1500年  
1400  
1520  
1530  
1540  
1550  
1560  
1570  
1580  
1590  
1600  
1620  
1630  
1640  
1650  
延寶八年  
1680年



初開年代	寺名	派別	本寺	開山	同生所	初開地	鎮守堂
享祿元年 (天保三年)	長勝寺	通幻	宗徳寺	菊仙菰壽	越前	種里石	稻荷
慶長三年	華秀寺	通幻	長勝寺	格翁壽達	近江	藤崎村	
天文三年 (龍虎年中)	海蔵寺	通幻	長勝寺	江山智永	石見	吉田村	稻葉師
?	梅林寺	通幻	長勝寺	格翁壽達	近江	湯口村	稻荷
天正二年	清安寺	通幻	長勝寺	密田菰壽	常陸	赤石村	親音堂
享祿三年	享徳寺	通幻	長勝寺	秋田菰壽	越前	五本松	十三支堂
天正八年	日峰院	通幻	長勝寺	字翁保文	津輕	沖館村	金森稻荷
慶長十二年	壽昌院	通幻	長勝寺	在州磐宅	津輕	寶田村	稻荷
慶安元年	常光寺	通幻	長勝寺	聖眼雲祝	津輕	青森町	
?	長圓寺	通幻	長勝寺	聖眼雲祝	津輕	飯詰村	
慶長十八年	正法院	通幻	長勝寺	聖眼雲祝	津輕	蓬田村	
慶長年中	宗全寺	通幻	長勝寺	善巖壽續	羽州	荒川村	
正保二年	雲祥寺	通幻	長勝寺	聖眼雲祝	津輕	金木村	
?	全昌寺	通幻	長勝寺	松室權降	不知		
慶安二年	龍洲寺	通幻	長勝寺	不步雲歩	津輕	板柳村	
永正十七年 (享祿年中)	隣松寺	大源	(金勝寺)	梅英春香	越後	吉田村	稻荷
(右に同じ)	長徳寺	大源	隣松同門中	真顯壽泉	越後	高杉村	稻荷
天正十四年	正岳院	大源	隣松同門中	庭更守洞	越後	床舞村	稻荷
天正十三年 (元禄三年)	寶養院	大源	隣松同門中	花應春佐	武蔵	中別處	秋葉山
?	陽光院	大源	隣松寺	喜山了悅	津輕	桜庭村	稻荷

(寺院開山世代調(延寶八年))は曹洞諸寺院縁起(元禄十五年)による

文祿四年	天正十一年	文祿元年	永祿六年	慶長十年	天正元年	文祿元年	元龜二年	慶長四年	元和五年	天正十年	元和元年	文祿四年	文祿二年	寬永元年	寬永二年	天正十一年	(慶安元年)	天和三年	元和三年	(元和年中)	?		
東福寺	寶泉寺	天津院	惠林寺	常源寺	泉光院	藏先寺	正光寺	盛愛院	滿藏寺	鳳松院	照源寺	藏松院	高澤寺	松伝寺	永泉寺	安盛寺	川龍院	耕春院	保福寺	高徳院	福壽院	蘭庭院	寶泉院
通幻	通幻	通幻	通幻	通幻	通幻	通幻	月泉	通幻	通幻	通幻	通幻	通幻	通幻	通幻	通幻	通幻	通幻	大源	大源	大源	大源	大源	大源
常源寺	常源寺	常源寺	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院	耕春院
陽山演義	體岩義直	林山津梁	體岩義直	中庵永虎	察庵玄壽	中云善哲	然叟宗福	性山善權	兼江泉	金庵喜	梅月香	龍外龍	全室應	中巖操堂	中山種	年室善壽	明室禪哲	明室禪哲	明室禪哲	明室禪哲	明室禪哲	明室禪哲	明室禪哲
津輕	日向	津輕	日向	伊勢	上野	津輕	仙台	不知	不知	不知	不知	不知	津輕	津輕	津輕	津輕	津輕	津輕	津輕	津輕	津輕	津輕	津輕
小湊村	深浦村	和徳村	佐比内	和徳村	大光寺	磯崎村	磯崎村	乳井村	乳井村	乳井村	乳井村	乳井村	乳井村	森山村	新屋村	深津村	石川村	田舎館	黒石村	新岡村	(宮館村)	兼平村	鬼沢村